

隣家の壁とは互いに接しているため、無筋の煉瓦造や石造り建物など、構造や階高、強度の異なった建物が接して混在している。所どころで弱い構造の建物が崩落し、傾いた建物は政府が通路側に倒れないよう材木で筋かい丈に支える補強工事を応急的に行ったとのことである（住民談話）。

伝統的なネパール風建築物である煉瓦造の耐震化を図るため、鉄骨の柱を煉瓦の中心に据えモルタルで固めた補強柱を用いる建設現場も見られた（この現場は地震前から施工されていたとのこと）。



③避難所

市内の空地は至る所にテントが張られ、多くの住民がテントでの避難生活をしている。多くは家が倒壊したためであるが、中には余震が怖くて夜だけテント生活を送っている者も多い。

カトマンズ市中心部のトゥンディケル広場はかなり大規模な避難所で、約 5,000 人（内子供が 2,500 人）がテント生活をしている。中国政府から支援された大型の家形テント（所有は 2012 年慶門市と明記）が整然と張られている。その他中国赤十字からのテントも見られた。

20 人以上が集まると家形の大型テントが支給され、20 人未満だとブルーシートと材木を組み合わせた自前の簡易なテントで避難生活をしている。

訪問したテントでは、5 家族 25 人（必ずしも知人ではない）が集まり大型テントで共同の避難生活をしている。12 人のグループは大型テントを支給されないため、自前でブルーシートと材木を組んだ簡易なテントで共同生活を行っている。

食事は一日二回の配給があり、この避難所では震災直後から 6 月半ばまではインド政府から給食支援が続けられている。その他の支援として、韓国のサムソンはネットワーク支援として電話や充電器を提供し、国際 NGO の World Vision は大型テントで就学児の支援を行っていた。5 月 30 日から学校が再開したが、それ以前は就学児向けに学校代わりの簡単な教育プログラムをテントで行っていた。World Vision はネパール国内の 28 箇所の避難所で同様の活動を行なっている。UNESCO のテン



トでは未就学児の支援活動を行っていた。

仮設トイレは現在も増設中で、トイレ裏のトレンチに汚物を流し、地中浸透させる構造とみられる。仮設トイレ横には給水所が設けられており、手洗いの励行の看板も見られた。

大人は日中外に働きに出ているため、日中の避難所には子供たちの姿が目立つ。子供たちは学校再開(5月30日)で、少し落ち着きを取り戻しているとのことであった。ネパールの平均寿命は67.98歳(WHO世界保健統計2012年)とのことなのか、高齢者の姿はあまり見かけない。



④市民生活

電気は地震後2日目に回復したが、市民の生活が戻るにしたがって電力事情が悪化し、日中から夜にかけての計画停電が頻繁に実施されている。

街中の至る所に張られた被災者のテントは目立つが、物流はほぼ平常通りとのことであった。車、バイク、トラック、バスがクラクションを鳴らす独特の喧騒の中、人々は何事もなかったかのように日常の生活を送っているのが印象的である。



⑤地震動

地震の揺れはメルカリ震度階級で震度IXがカトマンズで報告されている他、バラトブルなどで震度VIIIが報告されている(“M7.8 - 34km ESE of Lamjung, Nepal”. USGS ホームページ (2015年4月25日). 2015年4月26日閲覧)。しかし、カトマンズ市やパタン市内には、無筋の煉瓦造建物や塀でも無傷で残っている構造物も結構多く見られ、必ずしも全てが被害を受けているわけではない。地盤や基礎構造との関連もあるが、一見した限りではJMA震度階級で震度IVから震度V弱程度(JICAネパール事務所長も同様の体感との証言)と推定される。

(2) 中山間地(カッポン、トリスリー、ゴルカ)

①カッポン市

カッポン市はカトマンズ郊外の丘陵地で、最近急速に住宅が増えてきた地域である。古い煉瓦造の建物は壁が落ちたり崩れたりしているが、比較的新しい建物には目立った被害は見られない。この村には1991年に沼津商業高校OB会が90周年記念事業として学校を建設し寄贈している。現在の生徒数は360人、教員21人、幼稚園、小学校から高校まで12学年を抱える公立高校として運営されている。丘の斜面の上(基盤はチャートの固い岩盤)に建つ煉瓦造3



階建ての学校であり、今回の地震で目立った被害はなかった。写真の緑マークは応急危険度判定結果の表示（赤黄緑の内、緑マークは安全）。地震から約1週間後に政府から派遣されてきた建築士が応急危険度判定を行ったとのこと。カトマンズ市内など主要な地域では地震後約2週間で学校の応急危険度判定を終えたという。

② トリスリー市

カトマンズから西方に急峻な峠道を越えて陸路で約70 km、車で約3時間の所にあり街で、街道沿いの典型的なネパールの街である。市の中心にはバザールがあり、周辺の集落を含め多くの住民が住む。石造りの建築物が多く、道沿いの古い建物の多くは大破している。比較的新しい建物では煉瓦蔵もあり、鉄筋コンクリートのラーメン構造を取り入れた煉瓦造建物には大きな被害は見られない。余震が怖くて夜は屋外で寝泊まりしている住民が大半である。政府からは2,000ルピーが配られたとの話を聞く。

川沿いの公立学校（幼稚園から大学まで）は校舎（煉瓦造の平屋で一部2階建て）の多くが被害を受け、一部の教室を使って学校が再開されている。学校のグラウンドは大規模な避難所となっていて、多くの住民がテント生活を行っている。食料は各世帯に米を約1か月分など比較的潤沢に支給されていて、家族毎に自炊生活を送っている。子供たちの屈託のない笑顔が印象的であった。

トリスリー診療所は1998年に静岡済生会総合病院の元院長岡本晃愷氏（故人）が私財を投じて建設した。この数年は運営費が確保できずにしばらく休診していたが、地元有志の支援で4か月前（震災の3か月前）から診療を再開していた。地震による被害は一部の壁に剪断クラックが入っているが大きな損傷は見られない。現在、医師2名、看護師4名、レントゲン技師1名、事務スタッフ2名で運営され、地震直後には多くの負傷者が運びこまれ、救急医療活動を行った。

地元有志からなる運営委員会のメンバーによると、運営上の課題として、医師の給料20万ルピーの確保と診療所の医療水準に対する住民の信頼確保があるとのこと。日本から医療スタッフが短期間でも来てくれると、住民の信頼は大いに増すとの意見もあった。

